

講演録・インタビュー

宗教学に基づく宗教教育の必要性

講演 ティム・イェンセン¹

解題・聞き手・翻訳 藤原聖子²

2023年8月23日実施（於 東京大学本郷キャンパス）

2023年8月21～24日に、国際哲学人文学会議（CIPSH）の総会とカンファレンスが、慶應義塾大学三田キャンパス・東京大学本郷キャンパスにおいて開催された。人文学領域のさまざまな国際学会から代表者が集ったこのカンファレンスのテーマは「グローバル・デジタル時代の人文学」であった。初日の基調講演者の一人として、CIPSH 副事務局長でもある国際宗教学宗教史学会（IAHR）のティム・イェンセン会長が来日し、講演を行った。イェンセン氏は、グローバル化が進むこの四半世紀間、「宗教学に基づく宗教教育」を時代に即した教育のあり方として提示し、その推進のために奔走してきた。この基調講演も、分野も出身国も異なる多様な研究者に対して、「宗教学に基づく宗教教育」は世界どこにおいても必須の教育であると説くものだった。焦点は、「宗教学に基づく宗教教育」は、近年流行している「宗教リテラシー教育」とどのように異なるのかだった。

「宗教学に基づく宗教教育」も「宗教リテラシー教育」も、日本の宗教教育の三分法¹⁾に照らせば、宗教知識教育に重なる。だが、どちらも単に知識を伝達するだけの教育ではない。ではどのような点で知識伝達以上の教育なのか。そして「宗教リテラシー教育」の「知識伝達以上」の部分にはなぜ問題があるのか。講演はこれらの論点を中心に展開した。

講演後にイェンセン氏にインタビューを行い、同じテーマについてより具体的に伺った。イェンセン氏の出身国であるデンマークやヨーロッパの宗教教育事情が話の前提になっているため、それについてはインタビューアが注で補足説明を施した。

¹ Tim Jensen : 南デンマーク大学教授・ハノーファー大学名誉教授、国際宗教学宗教史学会（IAHR）会長、国際哲学人文学会議（CIPSH）副事務局長（2023年10月から同副会長）

² ふじわらさとこ : 東京大学教授、国際宗教学宗教史学会事務局長、2023年9月から日本宗教学会会長

講演（抄訳）

お招きいただきありがとうございます。本日私が皆さまにお伝えしたいのは、「宗教学に基づく宗教教育」²⁾は、世界のどこでも、その国が国教制であろうと政教分離制であろうと、公教育³⁾において必要であるということです。



「宗教教育」はヨーロッパにおいても自明なものではない

「宗教学に基づく宗教教育」とは、「宗教から学ぶ教育」⁴⁾ではなく「宗教学から学ぶ教育」です。私が言う「宗教学」とは学術的・科学的な宗教学研究⁵⁾のことです。このようなものの言い方は挑発的に聞こえるかもしれませんが、というのも、ヨーロッパにも、私の意見に同意しない人たちは大勢いるのです。人間には宗教学ではなく宗教が必要なのだと言う人たちはです。ですから、そのような社会において、宗教学に基づく宗教教育を推進する私の立場は、規範的であり政治的であるとも言えます。宗教学そのものは客観的であり非規範的であるべきですが、それを実社会に広めようという行為は、一つの立場の選択を促すわけですから。

つまり、私は社会のあり方について、何でもよいとする相対主義者ではなく、開かれた民主的な社会を理想の社会と考えています。その選択は規範的です。そしてそのような社会には宗教学に基づく宗教教育が必要だという私の主張は、一つの価値の選択になりますから、やはり規範

的です。一般的に言って、民主的な社会の市民は、物ごとに対して批判的・分析的な思考を向けることが求められます。そのような思考は宗教という対象にも向けられるべきです。そこで必要とされるのが、宗教学に基づく宗教教育です。

私自身、大学教員になる前に高校の宗教科の教師を務めたこともあり、さらに宗教に関する知識を要する企業や公務員のためにコンサルタントも務めるなど、宗教学に基づく宗教教育を広く社会に広める努力をしてきました。

「宗教リテラシー教育」と「宗教学に基づく宗教教育」の違い

私が言う宗教学に基づく宗教教育は、近年しばしば耳にする「宗教リテラシー教育」⁶⁾に似ているところもありますが、重要な点で異なりま

背景 デンマークの宗教教育の歴史と現状

イェンセン氏が研究・教育に従事するデンマークでは、小学校から高校まで、宗教科が公立校においても存在する。国民の多くは現在は「無宗教」(宗教所属を問われれば「キリスト教」と答えるとしても、日常的には教会に行くことも聖書を読むこともない)だが、他の北欧諸国と同様に(準)国教制を維持しているため、私立・公立を問わず宗教教育が継続されている。しかしその内容は過去半世紀の間に変化した。当初は、国教であるルター派プロテスタントに基づく宗派教育が行われていた。担当する教員は神学者や牧師だった。1975年に最初の変化が起こり、非宗派教育的な宗教知識教育が導入された。その後、移民の増加やグローバル化とともに、キリスト教以外の多様な宗教について学ぶ内容が増加し、現在に至っている。公立高校の宗教科は大学の宗教学に準じた内容によってカリキュラムが組まれ、教員にも宗教学の学位を取得した者が多い。それに対して小学・中学校の宗教科は、公立であってもキリスト教中心になることもあり、これは神学出身の教員が多いことによる。

つまり、デンマークの宗教教育には現状として、知識教育に重点を置いた教育と宗派教育的な教育の二つが存在している。イェンセン氏の「宗教学に基づく宗教教育」という語は、後者の「キリスト教神学に基づく宗派教育的宗教教育」ではない、前者の教育を指すための表現である。

参照：ヨーン・ボルブ「デンマークの宗教教育における仏教とイスラームの表象」『宗教研究』89別冊，2016

す。宗教リテラシー教育の歴史についてまとめているB・マーカスとA・ラルフの論文⁷⁾を参照しますと、宗教リテラシーには次の四つの次元が存在するとされています。

第一に、諸宗教について語るときに用いられるキーワードに関する事実的知識。第二に、宗教学の理論に関する概念的知識。第三に、宗教学の方法論に関する知識。第四に、宗教教育が自己認識 (one's own sense of self自分は何ものかについての理解) に及ぼす影響についてのメタ認知的知識です。この第四の次元を公教育に含めることには私は懐疑的です。

比較のために、宗教学に基づく宗教教育を推進する私の理由を三点にまとめてみます。

1. もし科学に基づく知識一般が、文化的・社会的に価値をもつと考えられているのであれば、そしてもし人類、文化、社会、歴史に関する科学に基づく知識が同様に価値をもつと考えられているのであれば、宗教に関する科学に基づく知識も価値をもつとみなされるべきです。なぜなら、「宗教」と呼ばれるものは、重要な人間的・文化的・社会的・歴史的現象だからです。宗教は歴史においても現在においても文化や社会に多大な影響を及ぼしています。人間や歴史について知りたかったら、宗教についても知らなければなりません。

ただし、宗教を何か特別なものと受けとめてはいけません。確かに人権の中でも宗教(信教)の自由は、表現の自由やプライバシーに還元されない、それとして重要な権利であるとみなされてきました。しかし、宗教を他の文化・社会現象とは異なる、特別なものととらえてしまうと、他の文化・社会現象と同様に研究したり教育したりすることが不可能になります。宗教への向きあい方を特別ではない、ふつうなものにする必要があります。

2. 「宗教」と呼ばれるものは、信仰のある人なら皆それが何だか知っている、というようなものでありません。天が与えたものでもありません。信じる人にとっては、聖典はただの本ではなく、聖なる存在を指し示しています。しかし、公教育においては宗教を文化システムと

してとらえるべきです。

3. そのような文化システムとしての宗教は、問題なく、教育の題材へと「翻訳」することができます。

公教育での宗教教育の存在を正当化する理由は以上に尽きる、それ以上の正当化は避ける方がよいというのが私の意見です。宗教リテラシー教育派は、これらに満足せず、第四として、宗教を通しての自己探求を理由に加えようとしています。しかし、それは副次的効果に留めるべきです。そのような探求を行う生徒もいれば行わない生徒もいるでしょうが、それは生徒の自由であり、共通の教育の目的に入れるべきではありません。

「社会に役立つ宗教教育」論の問題

宗教教育の目的としてよく掲げられるものには、そのように生徒を宗教的・人間的に成長させることの他に、宗教対立や差別を防ぎ、平和な社会をもたらすというものがあります。こういった、「世界を救う」た



ティム・イェンセン (Tim Jensen)

1950年デンマーク生まれ。コペンハーゲン大学にて古代ギリシャ宗教史の分野で学位を取得し、コペンハーゲン大学、南デンマーク大学、ドイツ・ハノーファー大学等で教鞭をとり、現在は引退している。2016年にハノーファー大学から宗教学の名誉教授号を取得。宗教教育についても早くから積極的な発言を行い、国内外の関連する委員会で活動し、企業や自治体での社会人教育にも従事してきた。ヨーロッパ宗教学会 (EASR) の立ち上げに尽力し、事務局長を務めた他、2005年から国際宗教学宗教学史学会 (IAHR) の事務局長、2015年から同会長として宗教学の国際的振興に貢献している。2020年から国際哲学人文学会議 (CIPSH) の副事務局長をあわせて務めている。

関連する論文として、“RS-based RE in Public Schools: A Must for a Secular State,” *NVMEN*, 55/2-3, 2008; “RS-based RE—Uphill, Uphill, Uphill!,” in Steffen Führling (ed.), *Method and Theory in the Study of Religion: Working Papers from Hannover*, Leiden: Brill, 2017.

めの宗教教育論にも私は懐疑的です。宗教系私立校とは異なり、公立校の宗教教育は生徒たちを宗教的に成長させる場でも宗教間対話のための場でもないのです。それらは科学外在的な目的です。公立校の宗教教育の目的はあくまで科学内在的なもの、つまり知識の習得や分析力の獲得です。公教育では、生徒が何教徒であろうと無宗教であろうと区別せずに、同じように宗教について教えることが適切です。生徒たちがそれまで宗教に対して持っていた思い込みとは違う見方があるのだ、自分の考え方や生き方とは違う考え方や生き方もあるのだと宗教学に基づいて教えることが、私の推進する宗教教育です。

かつて、20年前には私も宗教教育は、寛容、人権の理解や尊重などの科学外在的な目的に役立つと考えていました。当時ヨーロッパではそのような考えのもとに宗教教育の有用性を謳う試みが相次いでいました。その一例は、欧州安全保障協力機構(OSCE)の諮問委員会である「宗教・信仰の自由に関する専門家委員会(ODIHR Advisory Council of Experts on Freedom of Religion or Belief)」による「公立校での宗教・信仰についての教育の指針(Toledo Guiding Principles on Teaching about Religions and Beliefs in Public Schools)」⁸⁾(2007年に刊行)です。

しかし、その後の、宗教教育の効果を検証する研究においては、宗教教育が宗教的寛容を促進したことを示す客観的なデータは出ていないのです。宗教教育を10年受けようが、その結果としてよりよい市民に成長したというエビデンスは少なくともヨーロッパにおいては存在していません。宗教教育が義務教育として組み込まれているデンマークでも、宗教に関する公共の議論は、未だに宗教に対する偏見やステレオタイプで溢れています。しかし、だからといって、宗教学に基づく宗教教育は不要だということにはなりません。それは文化・社会の他の側面についての教育と同じように必要なものです。

大学の宗教学の授業も知識を重視すべき

私は先ほど、宗教は文化現象だと言いました。公教育では宗教を、文化を超えた超越的なものとして見るのではなく、人間的現象として見ようと

いう意味です。このように考える宗教学者たちの大学の授業でのトレンドは、さまざまな宗教現象の背後にどのような政治的かけひきがあるかを暴いてみせるものです。R・マッカチョンが率いるカナダのトロント学派がその代表です。ドイツのハノーファー大学のW・アルベルツもそうです。アルベルツも私と同様に宗教学に基づく宗教教育を推進してきましたが、実際にハノーファー大学で行っている授業は私とは異なり、「宗教と政治」「宗教と暴力」などのテーマ的なもので、もっぱら現代社会に焦点を合わせています。それに対して、私の宗教学の授業は、古代ギリシャの宗教史や比較宗教など、もっと古典的です。私は脱構築主義者ではなく、宗教現象をすべて政治に還元して説明することには反対なのです。宗教史に関する知識教育的な授業はあってよいはずですが、宗教を政治に還元することなく、同時に神学のように宗教の真理要求を受け入れることもなく、宗教を文化・社会現象として研究し教育することが必要だと思っております。

もちろん、そういった知識教育が、実社会の中では必ずしも中立的ではないということもわかまえています。私が1990年代にイスラモフォビアの問題について初めてデンマークの新聞に寄稿したときのことです。私はその記事の中でイスラームに対するステレオタイプを批判し、現実のイスラームの多様性に目を向けよと論じました。ところがその記事に対して苦情を送ってきた人たちはムスリムの人たちでした。彼らは「イスラームはイスラームだ」と、つまり多様に変化するものではないと主張したのです。それはナンセンスです。イスラームであれ何教であれ宗教は変化します。しかしそのような宗教学の見方は、それ自体としては客観的でも、メディアにのると政治的な発言になり、危険性を伴います。人々の価値に関わることだからです。

その一方で、社会には、学者は真実を語るものだという通念もあります。大学教育・中等教育を問わず、宗教教育において、宗教という概念に反省の目を向けたり、宗教について語ることの政治性について議論したりすることも確かに重要ですが、宗教に関するしっかりとした知識と分析のスキルを身につける教育をまず提供すべきであることを忘れてはいけません。

インタビュー



藤原 ご講演では、「宗教学に基づく宗教教育」を“scientific”と形容されていましたが、“science”の日本語の訳語である「科学」は、単独では自然科学を指すのがふつうです。先生がこの言葉で意味されていることをもう少しご説明くださいますか。

イエンセン 「科学」を定義するとなると一仕事ですが、もちろん、自然科学という意味で使ったわけではありません。宗教を自然的、人間的⁹⁾、社会的な現象として見ることにより、宗教を他の歴史的、社会的、人間的現象と同じように研究できるとするアプローチのことをそう呼びました。つまり、「経験科学」としての「科学」です。「宗教とは何か」に関する理解を自分の研究の出発点に置くならば、その点では演繹的ともいえますが、重要なのは経験的なエビデンスに裏付けられていること、観察可能で他者と共有可能である（公共性をもつ）ことです。研究プロセスの透明性を指すとも言えます。常に自己反省的であることですね。

藤原 そのような研究を土台にしているのが「宗教学に基づく宗教教育」なのですね。そうしますと、逆に「科学的」ではない宗教教育とは

どのようなものになりますか？

イエンセン たとえば「生きるとは」「死とは」といった、大きな問いに取り組む宗教教育が挙げられます。アメリカの大学にも宗教教育を、人生の大きな問いに取り組むことに結び付ける人たち、あるいは人類のウェルビーイング（幸福）への貢献に結び付ける人たちがいます。そこには解釈学の影響があるのではないかと思います。

つまり、個人の内面になにかある。そのあるものを外部に表現する。他人の表現を自分の中に取り込み追体験する。こういった理解の方法は解釈学と呼ばれています。宗教学はそれに対して外側から、すなわち社会的ファクターから宗教をとらえます。そのとらえた内容は言語、さらに研究で共有可能なものです。

藤原 大きな問いに取り組む宗教教育は、デンマークでは行われていないのですか？

イエンセン ありますよ。死とは何か、愛とは何かとか、近親者の死に際して悲嘆にどう向き合うかといった実存的問題に取り組ませる授業も一部に存在しています。そういった授業を行う教育者には、実存的問題については、教師は教えられない、生徒が自ら考えるのみであると言う人たちもいます。

そのような宗教教育もあってよいのですが、学校では、科学的な宗教学により発見された内容を学ぶ機会があることが望ましいと考えます。そのような教育が可能になるには、適切な教職課程で学んだ教員が必要です。デンマークでは公立校にも宗教科が存在するため、教員養成システムも整っています。

藤原 デンマークの中等教育レベルの宗教教育は、現在では、道徳教育的なものよりも宗教学に基づく知識教育的なものの方が中心なのですね。

イエンセン そもそもなぜデンマークではすべての学校に宗教科があるのかですが、それは国教制だったからです。デンマークの国教はルター派プロテスタントです。かつては、よきキリスト教徒がよきデンマーク市民になると思われていたので、学校でキリスト教教育が行われたのです。社会にはよい秩序とよい道徳が必要であるとされ、道徳と宗教は関係があると考えられていたので、宗教教育があたりまえのように組み込まれたのです。それはデンマークだけでなく北欧諸国に共通する特徴です。

ドイツの宗教教育への取り組みは州ごとに異なります。宗派教育のない州の一部には、価値教育を導入したケースがあります。それは生徒が価値や人生の意味をとらえるための教育です。そのように意味を作り出したり道徳を与えたりする教育は、世界の多くの地域の宗教教育において行われています。しかし、私の考えではそういった教育は家庭や教会・モスクでなされるものであり、公立校の授業で行うものではありません。

藤原 しかし、知識の伝達だけでは無味乾燥な授業になりませんか？

イエンセン 宗教学に基づく宗教教育にも、大きな問いはありますよ。しかし問いの種類が違うのです。2023年の教育にふさわしい、宗教学的な大きな問いは、たとえば、「なぜ宗教は存在するのか」「宗教はどのような点で人類の進化を促進したか、あるいはしなかったか」「宗教とは何か。どうしたらそれを定義できるか」「宗教（信教）の自由は特別に尊重されるべきものか、その他の自由と同じ程度でよいのか」などでしょうか。

現在の宗教学では、M・エリアーデの宗教学は、非科学的だ、疑似神学だと批判されています。私もエリアーデの方法論や神学的前提は問題だと思います。しかし、実は私も若い時はエリアーデのファンだったのです。エリアーデが書いたものは私をすっかり魅了しました。それは個人的・実存的なレベルでの影響と言えるでしょう。私の専門は古代ギリ

シャの宗教史ですが、そのような古代宗教史に興味を持ったのは、科学的な宗教学者が、ギリシャ宗教はおもしろいよと言ったからではありません。エリアーデの描写力に胸が躍ったのがきっかけになったのです。

藤原 描写力に惹かれたということだと、美的な魅力もあったということですか？

イエンセン そうです。私は学生の頃、ギリシャ宗教とギリシャの「名誉」という価値に特に関心を持つようになりました。西洋キリスト教のいわゆる「罪」の社会の観点から、ギリシャ社会の「名誉」をどう理解するかとか。あるいは草原で馬が草を食む風景とか。実存的なレベルよりもっと広い、文学的・詩的な次元での魅力も、生徒や学生には学ぶ刺激になります。科学的真理だけで人は興味をもつわけでは必ずしもないということです。

ですから、もちろん宗教教育の教師は、生徒に、実存在的関心をもってはいけないなどと説くわけではありません。生徒は実存在的レベルで刺激を受け、その結果信仰をもつかもしいし、信仰から離れるかもしれません。それは生徒それぞれに任せるべきで、教師がどうこうすることではありません。そういった刺激を与えることを、宗教教育の明示的な目的にするのはよくないというのが私の考えなのです。

それに、宗教の美的・詩的な側面にばかり注目し、宗教の暴力的な側面を見ないというのも教育では問題です。講演で触れた、ヨーロッパの「公立校での宗教・信仰についての教育の指針」や「教育における宗教。対話か対立か Religion in Education. Dialogue or Conflict (REDCo)」プロジェクト¹⁰などには、そのような困った傾向があります。宗教は人間的な現象だから、悪や暴力や戦争を生み出すこともあります。実存在的な問いを宗教教育の中心にすると、そういった宗教の暴力的側面が射程外になり、宗教の全体像が見えなくなっていくのです。私が宗教を人間的な現象としてとらえているのは、宗教を「しょせんは人間が作り上げたものだ」などと貶めるためではありません。宗教の明るい面も暗

い面も、ありのままをとらえたい、その意味で宗教に真剣に向き合いたいという気持ちによるのです。

藤原 ご講演で、宗教リテラシー教育を批判していらっしゃいましたが、「宗教リテラシー」が何を指すかは論者によって異なるのではないですか？

イエンセン 「宗教リテラシー」は、S・プロセロやD・ムーア等、アメリカの宗教学者が流行らせている最近の言葉で、デンマークでは使われないんです。小学校の宗教科教員を養成する研究者が、最近、宗教教育が国際的にも重視されていることを政治家に対してアピールし、働きかけようとして使ったくらいです。

ムーア¹¹⁾は私の考え方に近いですが、それ以外の宗教リテラシー教育論者には私は賛同していません。寛容を推進するとか、人権を推進するとか、マイノリティ差別に対処するとか、移民との摩擦を解消するとか、そういった科学外在的な目的を第一に掲げるからです。「宗教教育は、こういった社会的課題の解決に貢献するから必要なのだ」と宗教リテラシー教育論者たちは主張します。

しかし私はそのような主張を信じません。「宗教教育が平和な社会を築く」という説は、嘘だとまでは言いませんが、神話に近いです。そのような教育効果を示すエビデンスはないと指摘する研究も出ています¹²⁾。

もちろん私は、寛容や相互理解に否定的なわけではありません。しかし、長年宗教教育が行われているデンマークにおいても、ジャーナリストや政治家たちが宗教についていかに無知なままかには驚かされます。彼らがみな宗教教育を受けたとは思えないほどです。図書館には宗教学の本もたくさん入っているというのに、デンマークの公的論争は、完全にキリスト教中心主義だと言ってよいでしょう。宗教リテラシー教育論者は、寛容だの人権だのを掲げるよりも、宗教教育も、他の教科と同じように、科学的に行えるのだということを強調してほしいものです。

藤原 「他の一般教科と同じように」というのはご講演でも強調されていました。裏返すと、デンマークやヨーロッパでは、宗教教育は“ふつうの教育”として扱われていないのでしょうか？

イエンセン そうなのです。宗教教育は、二重の意味で特殊な教育として扱われているのです。一方では、信仰があり宗教を重視する人たちが、宗教は超越的なものだから、それについての教育は、文化や社会についての教育とは異なるものだと言っています。他方では、科学派の人たちが、宗教は合理的なものではないから、宗教の研究や教育は、十分に科学的にはなりえないと言っています。どちらの意見に対しても、「いや、宗教教育は、他教科と同じように、あたりまえに科学的に行えるのだ」と説明することが、公教育での宗教教育の存在をもっとも適切に正当化します。

それに加えて、宗教リテラシー教育論者たちは、文化遺産（ヘリテージ）的価値をも強調しすぎる傾向があります。たとえばプロセロは、「私たちはアメリカ人だ。アメリカにはキリスト教文化の伝統がある。だから教会に行かなくなったとしても、キリスト教に関する知識はみな持っているべきだ」と言います。これはナショナリズムとまでは言わなくても、それに近いものです。

デンマークにも、自国の現在のキリスト教のあり方が、宗教としてベストだという見方が蔓延しています。デンマーク人の多くはもはや毎週教会に通うことはなく、クリスマスなどのイベントのみを祝う、「文化的キリスト教徒」になっています。つまり、所属を尋ねれば「キリスト教」と答えたとしても、そのキリスト教はもはや（通常の意味での）宗教とは言い難いものになっています。しかし、逆説的にも、文化に過ぎないキリスト教だからこそ、言い換えれば、ドグマや熱心な信仰を失ったからこそ、デンマークのキリスト教は自由で安全であり、ゆえに最高の宗教なのだという考え方が、社会に広がっているのです。N・チョムスキーは、われわれは自国について語る時には特別に批判的（hypercritical）になるのがよいと述べましたが、その通りだと思います。

す。反対に、異文化について語るときには謙虚であるべきです。

藤原 まとめると、先生が宗教リテラシー教育を問題視されるのは、第一に、科学外的目的を掲げるから、第二に、教育効果があるというエビデンスがないため非現実的な教育だからということなのですね。

イエンセン そうです。先ほど、宗教学は外側から宗教を見ると言いましたが、補足すれば、ムスリムとして、ヒンドゥー教徒として暮らすのはどういうことなのかを、インサイダー（信者）の視点から見るとするのは重要です。科学的アプローチといっても、アウトサイダーの視点だけでは不十分です。

社会人教育を行っている、警察官でも医者でも、みなイスラームに対して偏見を持っているのがわかります。そこで、私は、いきなりスカーフや食の禁忌の話から始めるのではなく、最初に五柱¹³⁾を説明します。敬虔なムスリムにとって、五柱を守りながら生活するのはどのようなことなのかということから始めるのです。

そして、「イスラーム」という言葉を説明します。この言葉はヨーロッパでは「服従 submission」と訳されてきました。服従の対象がアッラーであっても、この言葉は信者を自由を奪われた奴隷か何かのように思わせます。命令に従わないものを地獄に送り込む専制君主のような神というイメージになります。そのイメージを転換するのです。アッラーは全てを知る父、人類に最善のものをもたらそうとしている神です。だからこそ、生きるためのガイドラインをシャリーア（イスラーム法）として人間に啓示した。ですから、ムスリムにとってシャリーアに従うことはあたりまえのことです。過激なイスラーム主義者だから従うではありません。イスラームの語は、服従ではなく「帰依 devotion」などと訳されるべきです。授業が終わった後、ムスリムの学生から、「ムスリム以外の人で、あなたのようにイスラームについて語る人を見たのは初めてです」と言われたことが何度もあります。こういったインサイダーの視点は必要です。重要なのは視点のバランスなのです。

藤原 日本では昨夏の安倍元首相銃撃事件以来、旧統一教会のことが改めて問題になっています。それを背景として、宗教リテラシー教育に新たな期待が寄せられています。そのような教育が、良い宗教と危険なカルトを見分ける眼を育てるというものです。そういった教育についてはどうお思いになりますか？

イエンセン そのような考え方は完全にまちがっています。そういった、宗教（信教）の自由を狭めるようなものはデンマークにはありません。もちろん見えない抑圧はありますが、法律レベルでは存在していません。宗教学に基づく宗教教育では、その意味でのリテラシーは、たとえ複数の教育目的のうちの一つだとしても、入れるべきではありません。

宗教は良いとか悪いとかいうものではないのです。繰り返しますが、宗教とは人間が行っているものです。ですから、同じ宗教が、一般社会の基準からすれば、良くもなれば悪くもなります。よく見られる、「好戦的なイスラーム主義者はイスラームを悪用している（本当のイスラームは平和的なものだ）」とか「カルトは宗教を悪用したものだ」といった言い方は、宗教学では意味をなしません。

確かに、1995年のオウム真理教事件のとき、「宗教学者は事前に警告することができたはずだ」という意見が、宗教学者の中にも見られました。しかし、私の考えでは、宗教学者の役目は「宗教団体によって行われた暴力や、宗教的に動機づけられた犯罪について、警告すること」ではありません。宗教学者の役割は、「それも宗教がもたらし得ることの一つだが、こういった別のこともまたもたらし得るのだ」と教育において示すことです。

2001年の同時多発テロ事件に際しては、宗教学者B・リンカン¹⁴⁾やH・キッペンベルク¹⁵⁾の論考が教育でも参考になりました。テロ実行犯が従ったとされる手引きは、シャリーアに基づいたものでした。それはテロが儀礼的（宗教的）殺害として行われたことを示していました。実行犯は犯行前に身を清めましたが、それはイスラームで供儀の前に行う

儀礼と同じでした。つまり、テロは殺人ではなく、供儀＝サクリファイスとして解釈されていたのです。ユダヤ・キリスト教・イスラームの伝統を踏まえるなら、そのような供儀を求める父とは何なのかという問いが生じるでしょう。こういった扱いの難しい事गरらについては、教師の役割は生徒に問いをなげかけることであり、答えを提供することではありません。生徒や学生が問いを、より考え抜かれた形で問うことができるようにするのが教育の役割です。

もちろん、さまざまな宗教について教える教育は、相対主義的な立場からのものですから、自分の宗教に対して絶対的な信仰を持つ人の信念を揺るがすことはあるでしょう。それによってその人が他の宗教に対して寛容になることも、教育の一つの結果としてはありうるものです。しかし、寛容な態度の育成を、宗教学に基づく宗教教育の目的として最初から掲げると、宗教のとりあげかたに偏りが生じやすくなります。全ての宗教について、それらの全ての側面、暴力や犯罪につながりうる側面も含めて教えることが、宗教学に基づく宗教教育においては重要です。

藤原 ヨーロッパには、フランスを除き、宗教教育が存在するからカルト問題が日本ほど大きくないのだという意見についてはどう思われますか？

イエンセン 1980年代前後には、少しではありましたが、デンマークの中等教育でカルトが取り上げられたこともありました。サイエントロジーや統一教会などです。サイエントロジーをふつうの宗教として扱い、カリキュラムに組み込むことは、教団を宗教として承認することになりかねないので、慎重を要します。しかしまた、サイエントロジーは危険なカルトだと説く教育が、被害を防ぐという現実的な効果をもたらすかという、それも疑問です。考えてみてください。学校では他教科で、宗教に関係しない犯罪やそれに対する刑罰についても取り上げています。その教育の結果として、犯罪率は低下しているのでしょうか？

われわれ教員の役目は、問いを投げかけ、物ごとをより複雑にすることです。イスラームの名誉殺人を例にとりましょう。ムスリムの父や兄が、異教徒と結婚した娘や妹を名誉殺人として殺害する。それは確かにひどいことです。しかし、デンマークのキリスト教徒や無宗教の男性にも、離婚後に元妻を殺害した人もいれば、DV問題を起こす人もいます。それらの事件については、誰もキリスト教が原因だ、無宗教が原因だと説明したりしません。つまり、宗教を何らかの事件の主要な原因であると決めつけてしまうことも、宗教に対する過大評価です。これも宗教リテラシー教育論者にありがちなのですが、困った問題です。

宗教学に基づく宗教教育では、学べば学ぶほど、ふつうの宗教と危険なカルトの区別は簡単ではないと気づくでしょう。決してその逆ではないのです。

藤原 なぜ「宗教教育は社会的課題の解決に役立つ」とアピールしてはいけないのかについて、先生のお考えはよくわかりました。ただ、デンマークにはすでに宗教教育が必修科目として制度化されているため、存在意義をことさらに訴えなくてもよいのかもしれませんが、日本などに、新たに宗教学に基づく宗教教育を導入しようとする場合はどうでしょうか。社会の役には立たない、あるいは効果は立証されていないが、宗教について学ぶことは必要だとするだけでは社会の理解は得にくいように思うのですが。

イエンセン そうかもしれません。しかし、現実を見ずに期待ばかりで導入しても上手くいかないでしょう。それに現実を知れば課題もわかります。効果がないのは教育方法の問題なのか、他の原因なのか。そこに国際的な共同研究の可能性が 있습니다。

注

- 1) 宗派教育・宗教知識教育・宗教的情操教育。
- 2) 英語では“study-of-religions-based religious education”。
- 3) 公教育は私教育に対置される概念であり、公立校の教育も私立校の教育も含まれる。
- 4) 「宗教から学ぶ教育 learning from religion」とは、宗教を知り、自分の人格の陶冶などに結びつける教育を指す。イギリスで生まれた分類だが、日本の宗教知識教育に該当する「宗教について学ぶ教育 learning about religion」に対置される概念。
- 5) 英語では“scientific study of religion”だが、日本語では“science”の語は単独では自然科学を指すため、「学術的・科学的」と訳した。この語の意味するところについては、後半のインタビューを参照。
- 6) 国教制の伝統のあるヨーロッパの国々では一般に、公立校においても宗教科が存在する。そのような国々では、注4のイギリスの例のように、宗教知識教育と価値教育（日本の用語でいえば宗教的情操教育や宗派教育）を分類する試みが以前から存在する。それに対して、政教分離制のために宗教科が存在しないアメリカにおいて、この15年ほどの間によく聞くようになった言葉が、宗教知識教育の一種である「宗教リテラシー教育」である。ボストン大学のステファン・プロセロの『宗教リテラシー』（初版2007年刊行）がその皮切りとなった。宗教についてほとんど教わらずに育つため、アメリカ人は今や、新約聖書の4つの福音書の名前すらまともに挙げられないほど宗教に関して無知であると警鐘を鳴らした書であり、バストセララーになった。Stephen Prothero, *Religious Literacy: What Every American Needs to Know—And Doesn't*, San Francisco: Harper One, 2007、ステイーヴン・プロセロ（堀内一史訳）『宗教リテラシー——アメリカを理解する上で知っておきたい宗教的教養』（麗澤大学出版会、2014年）。
- 7) Benjamin P. Marcus and Allison K. Ralph, “Origins and Developments of Religious Literacy Education,” *Religion and Education*, 48/1, 2021.
- 8) スペインのトレド市で行われた会議時の宣言に基づくため、“Toledo Guiding Principles”と呼ばれている。
- 9) ここで言う「自然的」とは、超越的な現象としてではなく、現実世界に起きている現象としてとらえるという意味。「人間的」とは、人間らしい、人間ならでは、という意味ではなく、（神ではなく）人間の行為からなる現象として見るという意味。
- 10) 2006～2009年に実施された、欧州委員会の研究基金による国際共同プロジェクト。エストニア、ロシア、ノルウェー、ドイツ、オランダ、フランス、イギリス、スペインの中学生を対象に、宗教は対話と対立のどちらを促進するかを調査した。

- 11) "What is Religious Literacy?" <https://rpl.hds.harvard.edu/what-we-do/our-approach/what-religious-literacy>
- 12) J. C. Conroy, D. Lundie, R. A. Davis, V. Baumfield, L.P. Barnes, T. Gallagher, K. Lowden, N. Bourque, and K. J. Wenell, *Does Religious Education Work? A Multidimensional Investigation*, London: Bloomsbury, 2013.
- 13) イスラームの生活の基本をなす、5つの実践。信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼。
- 14) Bruce Lincoln, *Holy Terrors: Thinking About Religion After September 11*, Chicago: The University of Chicago Press, 2003.
- 15) Hans G. Kippenberg, "Consider that This Is a Raid on a Path of God: The Spiritual Manual of the Attackers of 9/11," *NVMEN*, vol. 52, 2005.